



Title	青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究
Author(s)	板倉, 憲政; 長谷川, 啓三
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 85-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7875
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究

板倉憲政(東北大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員)

長谷川啓三(東北大学大学院教育学研究科)

本研究は、スピルオーバー仮説や補償仮説の観点から家族成員の3つの関係(父母関係、母子関係、父子関係)の関連性を調査するために、男性45名、女性91名の大学生・大学院生を対象に質問紙調査を行った。本研究の結果、父母の結びつきと父子の結びつきとの間に有意な正の相関が示された。しかし、父母の結びつきと母子の結びつきとの間に有意な関連は示されなかった。また、父母の結びつきの低群は、中群や高群と比較して母子の結びつきに有意差は見られなかった。加えて、父母の結びつき低群は、高群と比較して青年の父親のイメージや母親の父親のイメージが共に否定的に捉えていることが明らかにされた。本研究では、父母関係と父子関係はスピルオーバー仮説を支持する一方で、父母関係と母子関係は補償仮説を支持する可能性が示唆された。

キーワード:スピルオーバー仮説、補償仮説、家族関係

問題と目的

青年期を対象とした心理臨床の現場で、青年個人の問題にアプローチする際に、母子密着といった特徴的な家族関係に着目することは少なくない。青年期では、家族との適切な距離を模索する時期であり、また、家族との距離のとり方に大きな変化が起きる時期である。それは時には心理臨床場面においても重要なテーマとなってくる(小岩, 2008)。とりわけ、近年では、成人しても独立していない子どもや、いつまでも自立した成人として子どもを見ることができない親などの問題が存在する(若島, 2009)。子どもが巣立つ時期における家族への支援では、親子間だけでなく、父母間の結びつきを含んだ家族全体の関係性を再調整していくことが重要であると指摘されている(岡堂, 1991)。これらのことから、青年期の家族関係を捉えることは、青年だけでなく、青年に関わる両親にとっても意義を持つものである。

このような家族全体の関係性を扱う上で、父母関係と親子関係との関連性を示す理論が大きく2つ存在する。1つ目は、父母関係が良好(否定)的になれば、親子関係も良好(否定)的になることを論じたスピルオーバー(Spillover)仮説である(Engfer, 1988)。親子間の緊張の可能性は、夫婦間葛藤の出現を有意に増加させる可能性があることを示した知見も存在する(Almeida, Wethington, & Chandler, 1999; Christensen & Mardolin, 1988)。2つ目は、夫婦関係が悪くなれば必ずしも親子関係が悪くなるわけではなく、夫婦が決裂、もしくは葛藤状態になることで夫婦関係において十分な欲求の充足が得られない場合に、親が子どもとの関係においてそれを補おうとする働きについて論じた補償

(Compensatory)仮説である(Engfer, 1988)。Belsky, Youngblade, Rovine, & Volling(1991)では、夫婦関係の悪さと母親の子どもへの関わりの頻度と関連があることを明らかにしている。

以上のように、スピルオーバー仮説および補償仮説双方を支持する結果が得られており知見が一致していない。そのような中、Erel & Burman(1995)は、68の研究結果をメタ分析した結果、スピルオーバー仮説を支持する研究が多いことを示した。しかしながら、Erel & Burman(1995)が取り上げた研究の多くは、スピルオーバー仮説ならびに補償仮説は、夫婦関係とどちらかの親子関係という2つのサブシステムを取り上げて検討しているものも見受けられる。例えば、父母関係の悪さに関連した母子密着が生起していると仮定した場合に、夫婦関係と母子関係のみに焦点を当てて検討したとき、夫婦関係の悪さを補償するように母子の連合が高まるといふ補償仮説が支持される。一方、夫婦関係と父子関係のみに焦点を当てて検討すると、夫婦関係の悪さがスピルオーバーし、父子関係も悪化するというようにスピルオーバー仮説が支持されることになる。加えて、父母関係が悪い場合に、母親の視点では、補償仮説のように子どもと結びついているように見えるかもしれないが、子どもの視点からすれば、母子関係は結びついていないという可能性もある。このように、これまでスピルオーバー仮説および補償仮説は対立するように扱われてきたが、検討の側面によっては、スピルオーバー仮説と補償仮説は必ずしも対立する仮説ではないことが言える。本論では、これまでの先行研究の問題点を改善するためにも、父母関係、母子関係、父子関係の3つのサブシステムの各関連を詳

細に見ていく必要がある。

とりわけ家族の各サブシステムの中でより重要な役割を果たしているのが父母関係であることが指摘されている。構造的家族療法では、密着した母子関係を解体して、新たに両親の連合を示す世代間境界を作り上げることが治療的に有効だとしている(Minuchin, 1974)。また、基礎研究においても、子どもの適応などに否定的な影響をもたらす一側面として「父母の問題」が挙げられる(Grych & Fincham, 1990)。わが国でも、夫婦の不和は、子どもの精神的健康に直接影響を及ぼすという影響関係が明らかにされている(菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002)。また、Grych & Fincham(1993)は、実際の夫婦関係よりも子どもの目に映る夫婦関係のほうが、子どもの発達にとっては重要な意味を持つことを指摘している。そのため、家族関係の研究では、子どもから見た家族成員の関係性という点から研究を進めていくことが重要である。つまり、家族のシステム的な相互影響過程を捉えるためには、子どもの視点から、父母関係、母子関係、父子関係の各関連性について検討していく必要があると言える。この関連性について検討することは、臨床家が世代間境界を作り上げるために父母関係を介入することで親子関係にどのような影響を与えるかという知見に繋がるため、臨床心理学的に意義があると言える。

以上のことから、本研究では、スピルオーバー仮説や補償仮説の検証を行う上で、父母関係を軸として青年の視点から家族内の3者間(父母関係、母子関係、父子関係)の関連性を検討することを主たる目的とする。

また、母子の密着した家族に関連する知見として飛田・狩谷(1992)は、母親の父親に対する非好意的な認知と子どもの母親への尊敬との関連性を明らかにしている。つまり、母子の密着した家族においては、母親が父親に対して肯定的なイメージを持つことと、子どもが母親に対して肯定的なイメージを持つこととの間に負の関連があるという複雑な相互影響過程が存在することが推察できる。このことから本研究では、家族内の3者間(父母関係、母子関係、父子関係)の関連性の検討に加え、父母関係と青年の認知する父母のイメージおよび青年の認知する一方の親(例えば、母親)が持つ他方の親(例えば、父親)のイメージも取り上げ、それらの各関連性について検討する。

方法

調査対象および調査時期

関東地方および東北地方の父母と同居している大学生・大学院生 169 名に対して質問紙による調査を行った。これらの回答から欠損値の見られた回答や極端に偏った

回答を除外した大学生・大学院生 136 名(男性 45 名、女性 91 名)を分析に用いた。対象者の平均年齢は男性 21.82 歳($SD = 3.49$)、女性 23.28 歳($SD = 4.37$)、対象者全体は 22.80 歳($SD = 4.14$)であった。調査時期は、2008 年 1 月～2008 年 4 月であった。

質問紙の構成

家族関係を測定する尺度 本研究では、家族成員の3者間(父母、母子、父子)の関係性を測定するため、質問紙において項目数が少なく、また簡潔に家族成員の各関係を解釈することが必要とされた。そうした理由から、狐塚・野口・閻間・石橋・若島(2007)や野口・狐塚・宇佐見・若島(2009)の家族構成因子である、「結びつき」、「利害関係」、「勢力」、「開放性」の4因子のうち、「結びつき」という項目のみを取り上げた。狐塚(2011)は、「結びつき」を、お互いの仲の良さや親密さ、連帯感の強さを表すものと定義している。本研究における「結びつき」も、狐塚(2011)と同様の定義を用いて、「父-母間」、「父-子ども間」、「母-子ども間」の結びつきを「非常に弱い」を1として「非常に強い」を10とする10件法により回答を求めた。

青年の認知する父母のイメージを測定する尺度 家族成員のイメージに関する尺度に関しては標準化された尺度や頻繁に活用されている尺度が存在しない。そのため、笹野・大橋(1993)の両親・祖父母に対するイメージを測定する尺度の項目を参考に、心理系の大学院生3名の協議をもとに作成した形容詞対からなる父母に対するイメージ測定(計15項目(例: 明るい-暗い、すぐれた-おとった、など))を用いて「青年の認知する父親のイメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親のイメージ」、「青年の認知する母親のイメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親のイメージ」について回答を得た。なお、本尺度は得点が高くなるにつれてイメージが否定的になることを示している。

分析方法 まず、青年の認知する父母のイメージ尺度の因子分析および内的整合性の検討を行った。その後、「父母関係が良好(拒否的)であれば、父子関係や母子関係も良好(拒否的)になる」というスピルオーバー仮説を検証するために、父母の結びつきと母子の結びつきと父子の結びつきの関連性を Pearson の積率相関係数を算出した。また、父母の結びつきを軸に、青年の認知する父母のイメージの関連性を Pearson の積率相関係数を用いて算出した。次に、「父母関係が拒否的であっても母子関係や父子関係が良好になる」という補償仮説を検証するために、父母間の結びつきを高群・中群・低群に分類した父母の結びつきの得点を独立変数、父子の結びつきと母子の結びつきおよび青年の認知する父母のイメージを従属変数に設定した一元配置の分散分析を用い

て検討した。父母の結びつきを3つに分割する上で、父母間の結びつきの値の平均値7.04 ($SD = 2.51$)を基準とし、平均値 + 0.50SD以上の数値(9~10点)を高群、平均値 ± 0.50SD内に属する数値(6~8点)を中群、平均値 - 0.50SD以下の値に属する数値(1~5点)を低群に属するデータとした。なお、分析には、統計処理ソフトSPSS19.0J for Windowsを使用した。

結果

尺度の検討

「青年の認知する父親のイメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親のイメージ」、「青年の認知する母親のイメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親のイメージ」について主因子法によるプロマックス回転の因子分析を行い、因子負荷量が.40以下の項目を削除した。その結果、最終的に因子の解釈可能性から全ての尺度において2因子で構成されていることが明らかにされた。第I因子は、「楽しいー苦しい」、「あたたかいーつめたい」、などのまとまりから「非好意的イメージ」と命名した。第II因子は、「はっきりしたーぼんやりした」、「にぶいーするどい」、などのまとまりから「非能力的イメージ」と命名した。次に、各尺度の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出したところ、それぞれ一定の信頼性が示された(Table 1, Table 2 参照)。なお、各変数の平均値と標準偏差をTable 3に示した。

父母の結びつきと親子の結びつきとの関連

父母の結びつきと親子の結びつきの関連性を検討した(Table 4 参照)。その結果、「父母の結びつき」と「父子の結びつき($r = .45, p < .001$)」、「母子の結びつき」と「父子の結びつき($r = .41, p < .001$)」の間に中程度の正の関連が示された。

Table 1 青年の認知する父親のイメージおよび青年の認知する母親の持つ父親のイメージのプロマックス回転後の因子パターン行列

	I	II		I	II
青年の認知する父親の非好意的イメージ($\alpha = .90$)			青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ($\alpha = .91$)		
楽しいー苦しい	.91	-.05	楽しいー苦しい	.86	-.10
あたたかいーつめたい	.82	-.10	おもしろいーつまらない	.82	-.03
明るいー暗い	.78	.00	あたたかいーつめたい	.79	-.07
すきなーきらいな	.76	.05	すきなーきらいな	.78	.01
おもしろいーつまらない	.76	.09	充実したー空虚な	.70	.13
にぶいーするどい	.62	.02	明るいー暗い	.68	.10
充実したー空虚な	.58	.26	家庭的なー非家庭的な	.67	.02
家庭的なー非家庭的な	.58	.06	にぎやかなーさびしい	.65	.08
自由なーきゅうくつな	.56	-.21	自由なーきゅうくつな	.64	-.10
青年の認知する父親の非能力的イメージ($\alpha = .78$)			青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ($\alpha = .72$)		
はっきりしたーぼんやりした	-.12	.76	はっきりしたーぼんやりした	-.08	.90
にぶいーするどい(逆転項目)	.15	-.75	はやいーおそい	.03	-.67
すぐれたーおとつた	-.13	.65	はっきりしたーぼんやりした	-.02	-.51
はやいーおそい	.00	.59	にぶいーするどい(逆転項目)	-.09	-.41
弱いー強い(逆転項目)	-.08	-.52	弱いー強い(逆転項目)	-.09	-.41
因子間相関	.47		因子間相関	.49	

Table 2 青年の認知する母親のイメージおよび青年の認知する父親の持つ母親のイメージのプロマックス回転後の因子パターン行列

	I	II		I	II
青年の認知する母親の非好意的イメージ($\alpha = .82$)			青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ($\alpha = .87$)		
すきなーきらいな	.75	-.09	楽しいー苦しい	.93	-.03
あたたかいーつめたい	.74	-.25	明るいー暗い	.83	.07
楽しいー苦しい	.66	.08	おもしろいーつまらない	.77	-.02
おもしろいーつまらない	.56	.25	すきなーきらいな	.72	-.11
美しいーみにくい	.52	.10	あたたかいーつめたい	.60	-.09
家庭的なー非家庭的な	.51	-.20	自由なーきゅうくつな	.53	-.07
充実したー空虚な	.50	.26	充実したー空虚な	.48	.19
明るいー暗い	.46	.11	美しいーみにくい	.47	.26
青年の認知する母親の非能力的イメージ($\alpha = .75$)			青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ($\alpha = .78$)		
はっきりしたーぼんやりした	-.22	.87	はっきりしたーぼんやりした	-.10	.87
はやいーおそい	-.13	.73	はやいーおそい	-.15	.70
すぐれたーおとつた	-.34	.48	にぶいーするどい(逆転項目)	.04	-.62
にぶいーするどい(逆転項目)	-.13	-.47	すぐれたーおとつた	.20	.55
			弱いー強い(逆転項目)	-.13	-.50
因子間相関	.45		因子間相関	.30	

Table 3 本研究における各変数の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
父母の結びつき	7.04	2.51
父子の結びつき	5.66	2.16
母子の結びつき	7.55	1.79
青年の認知する父親の非好意的イメージ	2.50	.84
青年の認知する父親の非能力的イメージ	2.53	.93
青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ	2.69	.83
青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ	2.83	.86
青年の認知する母親の非好意的イメージ	2.01	.59
青年の認知する母親の非能力的イメージ	2.57	.82
青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ	2.10	.66
青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ	2.64	.81

Table 4 父母の結びつきと親子の結びつきとの相関

Table 4 父母の結びつきと親子の結びつきとの相関			
		母子の結びつき	父子の結びつき
全体($N = 136$)	父母の結びつき	-.08	.45***
	母子の結びつき	.	.41***

*** $p < .001$

父母の結びつきと父母のイメージとの関連

父母の結びつきと青年の認知する両親のそれぞれのイメージとの関連性を検討した(Table 5 参照)。その結果、.20以上の有意な相関が見られたものに焦点を当てると、「父母の結びつき」と「青年の認知する父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する父親の非能力的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」の間に弱-中程度の負の関連が見られた($r = -.27 \sim -.69, p < .001$)。

また、「青年の認知する父親の非好意的イメージ」と「青年の認知する父親の非能力的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」、「青年の

Table 5 父母の結びつきと父母のイメージとの相関

	2	3	4	5	6	7	8	9
1 父母の結びつき	-.45 ***	-.30 ***	-.69 ***	-.27 ***	-.02	.12	-.54 ***	.02
2 青年の認知する父親の非好意的イメージ	-	.36 ***	.65 ***	.30 ***	.13	.07	.37 ***	.17 *
3 青年の認知する父親の非能力的イメージ	-	-	.41 ***	.64 ***	.04	-.07	.20 **	-.18 *
4 青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ	-	-	-	.44 ***	.13	-.01	.53 ***	.14
5 青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ	-	-	-	-	.00	-.20 **	.23 **	-.17 *
6 青年の認知する母親の非好意的イメージ	-	-	-	-	-	.39 ***	.36 ***	.17 *
7 青年の認知する母親の非能力的イメージ	-	-	-	-	-	-	.17 *	.68 ***
8 青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ	-	-	-	-	-	-	-	.26 ***
9 青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ	-	-	-	-	-	-	-	-

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」の間に弱—中程度の正の関連が見られた($r = .30 - .65, p < .001$)。

「青年の認知する父親の非能力的イメージ」と「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」の間に中程度の正の関連が見られた($r = .41 - .64, p < .001$)。また、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」の間に弱い正の関連が見られた($r = .20, p < .01$)。

「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」と「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」の間に中程度の正の関連が見られた($r = .44 - .53, p < .001$)。

「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」と「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」との間に弱い正の関連が見られた($r = .23, p < .01$)。一方で、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」、「青年の認知する母親の非能力的イメージ」との間に弱い負の関連が見られた($r = -.20, p < .01$)。

「青年の認知する母親の非好意的イメージ」と「青年の認知する母親の非能力的イメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」との間に弱—中程度の正の関連が見られた($r = .36 - .39, p < .001$)。

「青年の認知する母親の非能力的イメージ」と「青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ」との間に中程度の正の関連が見られた($r = .68, p < .001$)。

「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」と「青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ」との間に弱い正の関連が見られた($r = .26, p < .001$)。

父母の結びつきの差と親子の結びつきおよび父母のイメージとの関連

父母の結びつきを独立変数、親子の結びつきおよび父母のイメージを従属変数とした一元配置の分散分析を行った結果(Table 6 参照)、「父子の結びつき」($F(2, 133) = 14.27, p < .001$)、「青年の認知する父親の非好意的イメージ」($F(2, 133) = 14.44, p < .001$)、「青年の認知する父親の非能力的イメージ」($F(2, 133) = 7.01, p < .001$)、「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」($F(2, 133) = 43.03, p < .001$)、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」($F(2, 133) = 5.62, p < .01$)、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」($F(2, 133) = 18.93, p < .001$)において、それぞれ群間に有意差が見られた。

一方で、「母子の結びつきや青年の認知する母親の非好意的イメージ」、「青年の認知する母親の非能力的イメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ」では主効果がみられなかった。

次に、Tukey 法による多重比較を行った結果、「父子の結びつき」では、父母の結びつき低群に比べ、父母の結びつき中群や父母の結びつき高群において、「父子の結びつき」が高くなることが明らかにされた。また、「青年の認知する父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ」、「青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ」では、父母の結びつき高群に比べて父母の結びつき中群においてそれぞれのイメージの得点が高くなり、父母の結びつき中群に比べて父母の結びつき低群においてそれぞれのイメージの得点が高くなることが明らかにされた。また、「青年の認知する父親の非能力的イメージ」、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」では、父母の結びつき高群や中群に比べて父母の結びつき低群においてそれぞれのイメージの得点が高くなることが明らかにされた。

Table 6 父母の結びつきを群分けした一要因分散分析

	父母の結びつき低群(N = 32)		父母の結びつき中群(N = 61)		父母の結びつき高群(N = 43)		主効果	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
父子の結びつき	4.16	2.00	5.79	1.75	6.60	2.25	14.27 ***	高群、中群>低群
母子の結びつき	7.81	1.79	7.52	1.60	7.40	2.05	0.51 ns	
青年の認知する父親の非好意的イメージ	3.05	.96	2.51	.71	2.08	.68	14.44 ***	低群>中群>高群
青年の認知する父親の非能力的イメージ	3.13	.81	2.61	.82	2.46	.75	7.01 ***	低群>中群、高群
青年の認知する母親の持つ父親の非好意的イメージ	3.51	.93	2.44	.63	1.94	.70	43.03 ***	低群>中群>高群
青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ	3.25	.74	2.75	.92	2.63	.77	5.62 **	低群>中群、高群
青年の認知する母親の非好意的イメージ	1.98	.61	2.07	.58	1.94	.60	.71 ns	
青年の認知する母親の非能力的イメージ	2.33	.73	2.66	.79	2.62	.90	1.81 ns	
青年の認知する父親の持つ母親の非好意的イメージ	2.60	.70	2.08	.53	1.76	.58	18.93 ***	低群>中群>高群
青年の認知する父親の持つ母親の非能力的イメージ	2.65	.85	2.58	.71	2.72	.92	.36 ns	

p<.01, *p<.001

※多重比較は全て5%水準以下の有意差を示す。

考察

本研究は、スピルオーバー仮説や補償仮説の検証を行うために、父母関係を軸として家族内の3者間(父母関係、母子関係、父子関係)の関連性を検討することを主たる目的とした。本研究の結果、「父母の結びつき」と「父子の結びつき」には、正の相関が見られたことから、父母間の良好な関係が親子関係にも派生していくというスピルオーバー仮説を支持することが示された。さらに、「父母の結びつき」と「青年の認知する父親のイメージ」および「青年の認知する母親の持つ父親のイメージ」の間に負の関連が示された。このことから、父母の結びつきが変化すると、母親の父親に対する見方と青年の父親の見方が共変的に変化していく可能性が示唆できる。この知見は、臨床家が父母の結びつきが低い状態を改善するための介入をした場合、母子関係よりも、父子関係に影響を及ぼすプロセスが存在することが推察できる。

その一方で、父母関係と母子関係は関連しないことが明らかにされたことから、父母関係と母子関係はスピルオーバー仮説を支持しない結果が示された。さらに、補償仮説を検討するために、父母の結びつきの高群、中群、低群の間で、母子の結びつきの得点の違いを検討した結果、有意差はみられなかった。このことから父母関係の結びつきの低群の場合でも、父母の結びつきを補償すべく母子の結びつきが高まる動きがあることが確認された。また、「青年の認知する母親の持つ父親の非能力的イメージ」と「青年の認知する母親の非能力的イメージ」との間に負の関連が見られたことから、母親が父親の能力を否定的に捉えていた場合、青年の認知する母親の能力を肯定的に捉える可能性が少なからず存在する。この結果は、飛田・狩谷(1992)の母親の父親に対する非好意的な認知と子どもの母親への尊敬との関連性を明らかにした結果と類似する知見と言える。

以上の結果から、父母関係と父子関係の間はスピルオーバー仮説が支持される一方で、父母関係と母子関係の間は、補償仮説が支持されるということが明らかになり、

家族システムをスピルオーバー仮説および補償仮説の点から検討していくためには、父母関係、母子関係、父子関係の3つのサブシステムの各関連を詳細に見ていく必要が示されたと言える。

また、これらの結果が得られた理由として、母親が子どもに対して父親についてどのように語っているかという母親の役割が大きな要因として挙げられる。子どもが青年期の時期においては、父親より母親との心理的距離が近いこと、母親を介した父親の間接的影響も大きいことが指摘されている(尾形, 2011)。戸田・牧野・菅原(2002)は父-子の結びつきを強めるための母親の調節機能を「母親の取り持ち機能」と名づけ研究を行った結果、母親の取り持ち機能は子どもの父親への親和性を高めていることを見出している。これらの知見を踏まえると、父母の結びつきが高い場合は、母親は父親を肯定的に評価しているため、子どもの父親を肯定的に評価するようになり、その結果、父子の結びつきを高めることが推察される。そのため、父母関係と父子関係はスピルオーバーしていく可能性が推察できる。一方、父母の結びつきが低い場合は、母親は父親を否定的に評価するため、子どもも父親を否定的に評価するようになり、父親の共通した否定的評価を通して母子の結びつきの強さを維持・強化している可能性もある。このことから、父母関係と母子関係は補償仮説が支持される可能性が推察される。つまり、母親が青年に父親について肯定的もしくは否定的に語るかということが、スピルオーバー仮説を支持していくか補償仮説を支持していくかの重要な要因になり、とりわけ父子関係や青年の父親のイメージ形成に大きく影響を与えていると考えられる。

また、興味深い結果として、本研究では、父母関係を軸としたが、「父子の結びつき」と「母子の結びつき」と正の関連が示され、「父子の結びつき」と「父母の結びつき」の間にも正の関連が示されたことから、父子関係の良好さは、他の家族成員との関係も良好になるというスピルオーバー仮説が支持された結果が示された。この結果が

得られた理由としては、青年期の父子関係が良好になることで、母親だけが青年の進路やライフコースの決定などに関わっていることに対する負担感が軽減することから、母子関係が良好になる可能性が示唆できる。また、父親は、実践的なアドバイスをもらう対象(Youniss & Smollar, 1985)として青年から見られることから、積極的に青年の進路の相談やライフコースの相談に応じるなどの安定した父子関係によって母親の父親に対する見方が肯定的になり、父母関係も良好になるというシステミックな相互影響が示唆できる。このことから母子の密着を断ち切る上で、父子関係や父親の役割は重要であると言える。今後は、父子関係を軸にして、父母関係や母子関係および青年の父母のイメージの関連性について検討していくことが望まれる。また、本研究はあくまで相関研究である。そのため因果関係を構築していく基盤を築いていくことが必要になる。父母関係に介入した場合に生じる他の親子関係への影響過程を縦断的な実験によって明らかにしていくことが家族療法におけるエビデンスの構築や家族関係をシステミックで捉えるという点においては重要な課題であると言える。

最後に、本研究はあくまで青年の認知を扱った研究であることを指摘しておく必要がある。そのため、家族関係のシステミックなダイナミクスを反映しているのではなく、青年の認知の仕方のダイナミクスを反映しているという問題が含まれている。父母関係や父子関係や母子関係の各関連性を検討する測定の視点や方法は、他にも存在している。今後は、家族成員それぞれの視点を用いて各成員の関係や各成員が保持しているイメージの関連性について検討していくことが望まれる。

引用文献

- Almeida, D. M., Wethington, E., & Chandler A. L. (1999). Daily transmission of tensions between marital dyads and parent-child dyads. *Journal of Marriage and Family*, **61**, 49-61.
- Belsky, J., Youngblade, L., Rovine, M., & Volling, B. (1991). Patterns of marital change and parent-child interaction . interaction. *Journal of Marriage & the Family*, **53**, 487-498.
- Christensen, A., & Margolin, G. (1988). . Conflict and alliance in distressed and nondistressed families. In R. A. Hinde & J. S. Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*. New York: Oxford University Press, pp. 263-282.
- Engfer, A. (1988). The interrelatedness of marriage and the mother-child relationship. In R. A. Hinde & J. S. Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*. New York: Oxford University Press, pp. 104-118.
- Erel, O., & Burman, B. (1995). Interrelatedness of marital relations and parent-child relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **118**, 108-132.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1990). Marital conflict and children's adjustment: A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, **108**, 267-290.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1993). Children's Appraisals of Marital Conflict: Initial Investigations of the Cognitive-Contextual Framework. *Child Development*, **64**, 215-230.
- 飛田 操・狩谷佳子 (1992). 両親の「仲の良さ」の認知と親子関係 福島大学教育学部論集, **51**, 55-63.
- 小岩健裕 (2008). 大学生の親のイメージと家族満足度との関連 家族心理学研究, **22**, 65-75.
- 狐塚貴博・野口修司・間間理絵・石橋曜子・若島孔文 (2007). 家族構造の測定における構成因子に関する研究 立正大学臨床心理学研究, **6**, 19-32.
- 狐塚貴博 (2011). 青年期における家族構造と家族コミュニケーションに関する研究—青年の認知する家族内ストレスからの検討— 家族心理学研究, **25**, 30-44.
- Minuchin, S. (1974). *Family and Family Therapy*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (山根常男 (監訳) (1984). 家族と家族療法 誠信書房)
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文 (2009). 家族構造測定尺度-ICHIGEKI-の作成と妥当性の検討 東北大学大学院教育学研究科『研究年報』, **58**, 247-265.
- 尾形和男 (2011). 父親の心理学 北大路書房
- 岡堂哲雄 (1991). 家族心理学講義 金子書房
- 笹野完二・大橋康宏 (1993). 両親・祖父母に対するイメージの分析 日本心理学会第 57 回大会発表論文集, 116.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連: 家族機能および両親の養育態度を媒介として 教育心理学研究, **50**, 129-140.
- 戸田弘二・牧野高壮・菅原英治 (2002). 青年期後期の家族関係と精神的健康及び精神的・身体的不適応との関連 北海道教育大学実践総合センター紀要, **3**, 221-223.
- Youniss, J., & Smollar, J. (1985). *Adolescent relations with mother, father, and friends*. Chicago: University of Chicago Press.
- 若島孔文 (2009). 家族の病とストレス 日本家族心理学会 (編) 家族心理学年報 **27** 家族のストレス 金子書房 pp.130-140.

Examining the Association of Father-Mother and Parent-Child Relationships in Adolescence

Norimasa ITAKURA (*Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Tohoku University, Graduate school of education*)

Keizo HASEGAWA (*Tohoku University, Graduate school of education*)

The purpose of this study was to examine the association of three dyadic family relationships (marital, father-adolescent, and mother-adolescent) in terms of the spillover and compensatory hypotheses. We measured dyadic cohesion and adolescence's parental image as the index of family relationship. The research participants were 45 men and 91 women undergraduate and graduate students.

Results showed that marital cohesion and father-adolescent cohesion were positively correlated at significant level. However no significant correlation was found between marital cohesion and mother-adolescent cohesion. Also, no significant difference in mother-adolescent cohesion was found among the different marital cohesion groups. Moreover, both adolescent and mother in the low marital cohesion group assessed paternal image and mother's paternal images more negatively than those in the high marital cohesion group.

The findings of this study implied that spillover hypothesis can be applicable for father-adolescent, while, compensatory hypothesis can be applicable for marital, mother-adolescent.

Keywords: Spillover hypothesis, Compensatory hypothesis, family relationship.